

偏見の伝達者にならないために

「差別をしてはならない」とことは誰しも知っていることです。多くの人たちは「私は差別をしたことはない」と言います。しかし、自分の中にある差別につながる偏見を知らず知らずの内に伝えてしまっていることがあるかもしれません。

このことについて書かれたエッセイを紹介します。
「子育てと自分育て」について考える 藤田敬一

いつぞやバスに乗っていたら、うしろの席からお母さんの声が聞こえてきました。「あんな仕事、いやだね。あなたはある仕事をしたくないよね」。すると小学生らしい息子さんは「うん」と返事。

窓の外を見ると、タワー式駐車場で車の出し入れをしている男性の姿がありました。親の職業に対する見方が、ストリートに子どもに伝えられている瞬間でした。

指さしながら、「言うことを聞かないと、あんな人になるよ」と子どもに言っているのが聞こえてきたという。

島や中国大陸、台湾では漢字一文字の名字が多いんだよ」と言う。娘は「ふん」と納得した様子でした。ここから分かるのは、大人がきちんとした知識を身に付け、偏見から免れた価値観をもって子や孫に接することの大切さです。

この場合も、親の障がい者へのまなざしが子どもに伝えられているわけです。

考えられがちですが、人間をどう見るか（人間観）・人とどう向き合うか（生き合い方観）・どう生きるか（生き方観）をいま一度振り返り、自分はどうであったか（過去）・どうであるか（現在）・どうであろうとしているか（未来）を考えることにほかなりません。

こうして、子どもたちは親などの身近な人から、あるいはテレビなどを通して、職業観や身体観、人間観を身に付けていきます。わたしたちは無意識のうちに子や孫に自分の偏った価値観を伝える媒体（仲立ち）の役割を果たしているかもしれないのです。

人間は文字通り「人と人とのあいだ」です。

また、女子大生が障がい児を車椅子に乗せて散歩に出かけたとき、二歳くらいの子どもが駄々をこねて道に寝そべっている。二人で「お母さんは大変やね」と語り合っていたら、母親が、車椅子の少年を

娘が小学四年生のころでしたかね。「おとうさん！おとうさん！テレビに変な名字の人が出ているよ」と言うのです。テレビの画面を見たら、夏の甲子園大会で京都商業高校と報徳学園高校の決勝戦が映っていました。スコアボード横に掲示されている両チームの選手名には李や韓、鄭といった漢字一文字のものがある。そこで、わたしは娘に「日本の名字には漢字二文字が多い。もちろん森さん、畑さんといった漢字一文字の名字もあるけれど少ない。しかし、朝鮮半

※藤田敬一
日本の中国史学者
部落問題研究者

市人権推進課(教育庁舎1階)
TEL 32・2122
FAX 33・3525
Mail:jinkensuisin@city.komatsushima.jp

市民文芸 花みずき歌壇 (344) 松並敦子・選

音もなく過ぎゆく(時)を惜しみつつ家族の名前書きて
愛しむ
田浦町 西 照子

喉走る熱きしようが湯ふつふつと沸きくるものあり雪
の立春
立江町 湯浅かや子

雪の朝道路に残る足跡の新聞配達牛乳配達
田浦町 太田カツミ

雪被りし紅梅の蕾は地区守るごと曲り角にありて目を引く
江田町 深田 伴子

バスを待つ吹きさらしの芒原コートの襟立て足踏み三百
横須町 福島 夢栄

年末に八年ぶりのいとこ会思わぬ数で宴盛り上がる
中田町 倉橋 正則

惜しまれて散りし桜か関さんは短歌の数かず世に残しゆき
赤石町 田原トシ子

節分も過ぎてそろそろ春めけり今朝降る雨は春の音して
坂野町 橋本千代乃

嫁ぎ来て七十二年の歳月のわれより古き梅今年も咲けり
櫛淵町 松下 玉枝

ばあちゃんも会いたいだらうと吾を乗せ息子はひた走る
高速道を
横須町 三宅 敏恵